

令和2 (2020) 年度のテキストです

本日の授業資料

tenji2020_10-1-4、pdf×1、mp3×3

博物館展示論

第10講 展示の組み立てと農大口ビー展の器具と技術

1. 展示の構造 音声ファイル1 tenji2020_10-1.mp3

1) 展示シナリオ

展示室の順路(=動線)や展示室のレイアウト、展示資料の選択は展示シナリオをもとに選定される。もちろん展示シナリオは展示資料から作られるので、シナリオと資料の関係は鶏と卵のようなものではある。

展示シナリオの形態はさまざまで、物語風のこともあるが、箇条書きやフローチャートが普通。

2) 展示の階層

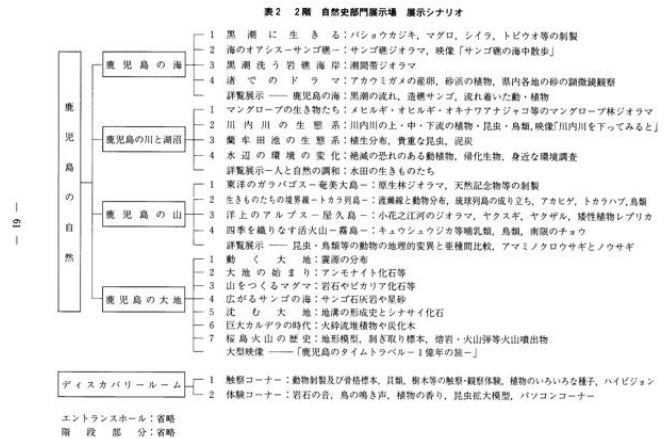
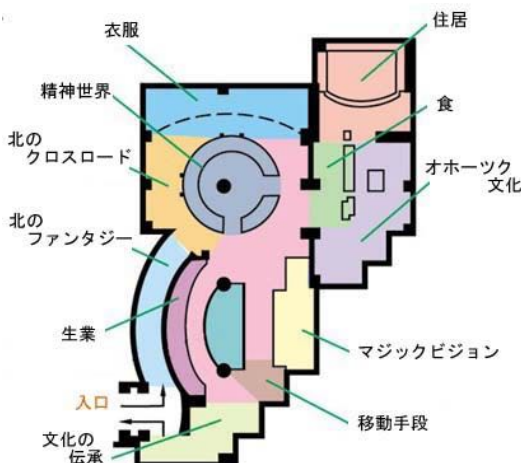
博物館業界では展示の階層について通常次のように扱っている。展示室>展示テーマ>展示コーナー>展示資料。つまり展示資料はいくつかまとまって展示コーナーを形作り、展示コーナーが複数あつまる展示テーマから展示室ができていく。場合によっては展示テーマの下に展示室がある場合、展示室=展示テーマとなっていることもある。

3) 階層性のない展示室

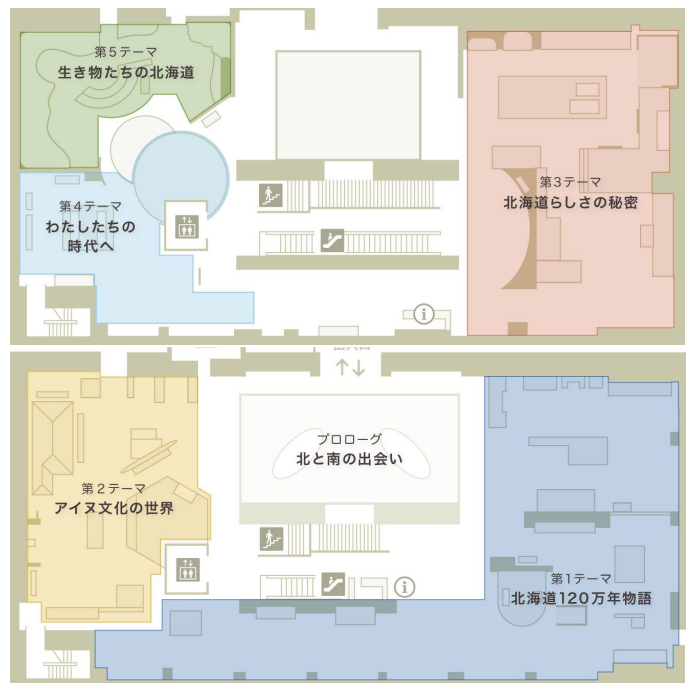
美術館のように個々の作品を鑑賞するような展示室では展示コーナーという概念がなく、展示室や展示テーマといった大きなくりのなかに個別の作品が陳列されて



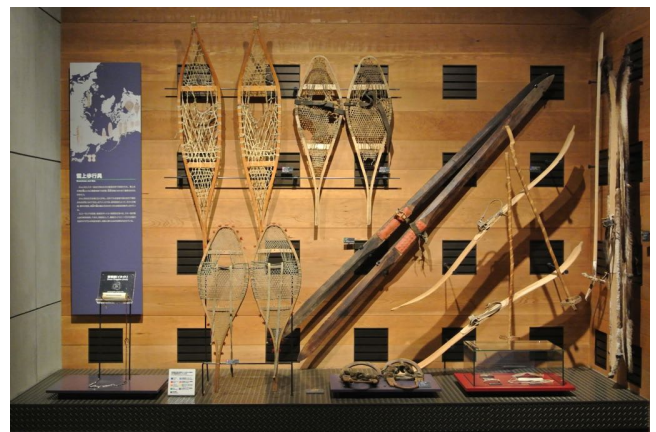
国立西洋美術館の常設展示室。展示コーナーという単位が見られない



鹿兒島県立博物館の自然史部門の展示シナリオ (井手口 1998)
https://www.pref.kagoshima.jp/bc05/hakubutsukan/shien/documents/6329_20120225153825-1.pdf



北海道博物館の展示テーマ 上2階, 下1階
<http://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp/exhibition/>



北海道立北方民族博物館の常設展示室から
 左: 展示テーマ

上: 展示コーナー「雪上歩行具」。「移動手段」のテーマにはほかに橇[そり]と舟のコーナーがある

2. 展示コーナーの見せ方

1) 特徴

展示コーナーは通常ひと目で見渡せる範囲に収まり、ケースの数も少数で、展示の単位としてわかりやすい。立ち止まって資料を見て解説を読んで、ひととおりの理解をする単位である。

2) 要素

北海道博物館の展示コーナー「箱館〔はこだて〕開港」（右上写真）を見ると、順路先頭となる左端にコーナー全体の解説グラフィックが置かれ、展示コーナーには展示資料とグラフィック、見えないがキャプションが配置されている。コーナー全体の解説は重要であり、これが欠けると展示の意図を伝えることが困難となる。展示コーナーを形作る要素としてコーナー解説グラフィックは不可欠である。

3) 誘導

資料とグラフィックを漫然と並べておくだけでは不親切になる。関連ある解説は資料のすぐそばに置くことが原則である、資料の形状や性質、寸法との関係からステージと壁面とに分かれて展示することもある。その場合でも資料と資料の関係、グラフィックから見るべき資料（あるいはその逆）が観覧者にわかるように、視線を誘導するように陳列する。場合によっては矢印やサインを用いて資料の関係や見るべき資料を誘導する。

3. 展示の文章

1) 原則 展示はデザイン

現在の博物館展示は資料とグラフィックとの組み合わせが主流である。資料は実物、文章は今も紙などへの印刷が主流で、ディスプレイ画面やプロジェクタからの投影は少ない。つまり文字数は限られ、書き換えもすぐにはできない条件下にある。長い文章で初めて可能になる細かな事実や表現、口頭での受け答えが作り出す理解や関係は期待できない。展示の文章は少ない文字数で言い切ることが求められる。それ以上の情報伝達は展示では不可能と割り切ることが必要だ。

もっとも重要なことは与えられた範囲や紙面に文章を収めることである。A3判1枚ならば、何が何でもその範囲で文章を完結させる。統一したフォントやサイズはそのままに、行間の調整、字句の節減などで努力する。

2) 文体 [音声ファイル2 tenji2020_10-2.mp3](#)

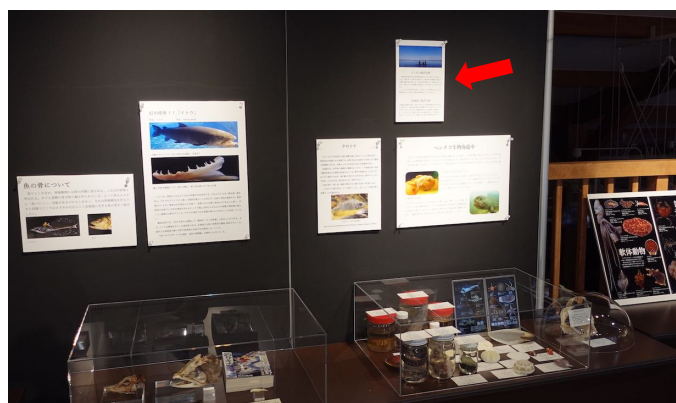
統一：展示室内、少なくとも展示コーナーの内部では、文体、フォント、デザインなどは統一する



展示テーマ1「北海道120万年物語」のなかの展示コーナー「箱館開港」



農大口ビー展の展示コーナー「銀の匙」。丸で囲んだ「雪日数と風雪災害」は作品とのつながりが切れている。矢印の空きスペースにつなぐための仕掛けを後から置いた。見学の際に確認してほしい。コーナー解説は右上のパネル



この部分にマンガは左ケース内の「釣りキチ三平」1冊のみ。しかし、コーナー全解説「マンガと海洋生物」（矢印）があるので、展示のテーマとつながりを持っている

簡素：カッコによる注記は原則として用いない。カッコを用いるのは地方名称や通称などの挿入では可能。また、出展明記は図表のみでよい。

3) 要点 資料が目の前にあることを意識する

展示の文章は、資料がおなじ空間に存在することを意識する。内容は、資料の解説という資料が主役で解説文章は資料をよりよく理解するための手段でもよいし、文章を主眼として記し展示資料が登場人物のように現れる表現でもよい。

展示は、場所と空間が特定されている。観覧者が展示室の文章を読む室内環境はおなじ条件にある。よってブログやネットニュースのような一般的な内容では不足があり、観覧者が立って読む場所の特性に合致した内容が求められる。さらに、来館者の期待を想像し、わざわざ展示会に足を運んだ苦勞が報われる独自の内容が期待される。

4. キャプション caption

1) 機能

2回目の授業でグラフィックを取り上げた。グラフィックが解説ならば、キャプションは展示資料の名札である。水族館では魚名札にあたる。

キャプションの機能は名札に加え、目的の資料を探しやすくする、資料の情報を深める、視線の誘導、装飾などがある。通常は資料1点につき1枚を資料のそばに置く。場合によっては、関連の高い資料、小型資料の場合は、複数の資料を1枚にまとめることがある。点数が多いだけにおろそかにできない。

2) 記載事項

キャプションの記載事項はさまざまである。最低限の必要事項は「資料名/作品名(タイトル)」の1点。追加事項は資料や展示目的により異なるがとして、

採集者/作者：作品の場合は作家名ともいう

寸法(サイズ)：縦×横×高さ、W×D×H、L=最大長

重量はふつう記載しない

年代：採集年、受入年、寄贈年、登録年、購入年、製作年、発表年、使用年 単に年を表記しただけでは意味不明で、何の年代か本来は明確にすることが必要。たいてい出来ていない

地域：これも使用地域なのか、製造地なのか、購入場所なのか明確にする

農業高校漫画「銀の匙」

あらすじ

札幌の私立中学に通っていた八軒勇吾は高校受験に失敗。学力競争と高圧的な父の数正から逃れるため、中学校時代の恩師の薦めで全寮制の大蝦夷農業高等学校(通称:エゾノー)に進学。農業をとおして自分のやりたいことを探していく。

作者の荒川弘氏

北海道中川郡幕別町生まれ、姉3人、弟1人の5人姉弟(ペンネームや作風から男性と間違われやすいが女性)。北海道帯広農業高等学校卒業。

作品の背景

「銀の匙」は連載していた『少年サンデー』の編集者が農業漫画を提案、読者アンケートでも中高生の多くが将来のことを気に掛けているという結果から、ピンと来て連載が決まったという。作者は「獣医漫画とか農家漫画はあるけど、農業高校漫画はないから、そのうちやろうかなとか思ってた」と語っている。作中には作者の実体験と同様のエピソードも登場する。

農大口ビー展の「銀の匙」のコーナーグラフィック。学生が提出した下の3項目4枚を1枚にまとめた

<p>農業高校漫画</p> <p>あらすじ</p> <p>札幌の私立中学に通っていた八軒勇吾は高校受験に失敗。学力競争と高圧的な父の数正から逃れるため、中学校時代の恩師である白石の薦めで全寮制の大蝦夷農業高等学校(通称:エゾノー)に進学し、農業をとおして自分のやりたいことを探していく。</p>	<p>制作背景</p> <p>前作となる『鋼の錬金術師』を連載していた『月刊少年ガンガン』(スクウェア・エニックス)から出版社を越えて得載誌を変えたことについて、ラジオ番組に作者の荒川先生が出演した時の話によると、いろんな雑誌や出版社からのお誘いがあった中で、『鋼の錬金術師』が連載中のごころから、荒川のファンで荒川の元に通っていた『銀の匙』の担当編集者である坪内が、農業漫画を提案し、その中でサンデーの読者層の話をした際に、中高生がかなりの確率で、将来のことを気にしているというアンケート結果を聞き、ピンと来て「いきます」という話になったそうです。</p> <p>荒川先生は2009年に、小学館企画でゆうきまみと対談を行っており、この中で「獣医漫画とか農</p>
---	--

<p>家漫画はあるけど、農業高校漫画はないから、そのうちやろうかなとか思ってた」と語っている。このとき語られた自身の体験談と同様のエピソードが作中にも登場している。</p> <p>作者の荒川弘先生</p> <p>北海道中川郡幕別町生まれ、姉3人、弟1人の5人姉弟。(ペンネームや作風から男性と間違われやすいが女性である。)</p> <p>北海道帯広農業高等学校卒業。その後、弟が高校卒業するまでの7年間、家業の酪農と創作農業を手伝いながら、「エドモンド荒川のペンネームで、『ゲームスト』内のイラストや『コミックゲームスト』(共に新声社)の投稿4コマ漫画を手がけていた。</p>	<p>代表作は鋼の錬金術師と銀の匙 Silver spoon である。他にも原作ではないが、アルスタートーン戦記の作画を担当している。</p>
--	---

学生が提出した原案の問題は、1) コーナー解説としては長すぎる、2) 1項目1枚の原則から外れている、3) 文章の内容がマニアックすぎる、という点。登場人物をあげて、あーしてこーしてという説明は悪手。制作背景やあらすじは、固有名詞は用いずに概要を説明するのがよい。作者を「先生」とするのもファンの視点なので避ける



上段

大型のキャプションは目立ち過ぎ

左：国立科学博物館（2018）企画展「標本づくりの技」（2018） 資料名、和名、学名、採集地、採集日、解説
 右：たばこと塩の博物館（2018）特別展「産業の世紀の幕開け ウィーン万国博覧会」 資料名、所蔵先、資料名（英語）、所蔵先（英語）

中段

観音崎自然博物館（2017）特別展「たねの世界」

左：和名、科名、学名、解説
 右：和名、科名、解説、植物体の写真やイラスト

下段

国立科学博物館ロビー展示

グラフィックは超大型キャプションでもある

所蔵先または所有者：寄託資料の場合は明記する

番号：収蔵番号、資料番号、番号、登録番号、Number

場合によっては、材質／素材名／画材名／、ふりがな／読み方、翻訳など

3) 変形形

資料1点のみの新収蔵資料やロビー展示では、キャプションとグラフィックが1枚に融合している場合がある。展示資料が地味であったり、全体の一部（種子、鱗など）の場合、全体の写真やイラストを入れる場合がある。

4) 素材と文字

グラフィックと同様に明朝体がゴシック体が普通だが小型であることを意識する。同一字体でも細い（=ウェイトの小さい）フォントを選択してもよい。文字サイズは観覧者との想定距離で選択する。つまり遠くから見る場合は大きく、顔を近づけて見るならば小さくてよい。

5) 大きい余白に注意

キャプションは大きいと資料より目立ち目障りにすなる。とくに余白は目立つので注意したい

この項の写真はオリジナルのほかはメーカーや販売店の画像を引用した

4. ロビー展で用いた展示の器具と技術 音声ファイル3

1) 簡易展示セットの典型 tenji2020_11-2.mp3

今年の農大ロビー展で用いた展示の道具と技術は、典型的な簡易展示セットで、小規模博物館の特別展と共通する。昨年はA0判ロール紙が使える大判プリンタ EPSON SC-T5250 を用い、背景としてイメージ写真を出力した。インクは耐光性が高く退色が少ない顔料4色と少ないが仕上がりは十分きれいで、農大ロビー展では多色インクプリンタの必要性は感じない。

2) プリンタ プリンタはキャノンの A3 判インクジェットプリンタ PIXUS iP8730 27,520 円 (ヨドバシカメラ) を用いた。インクは顔料6色。グラフィックの完成が展示前日に集中するので、プリンタは A3 機2台+A4 機1台の計3台でおこなった。現実の博物館でも同様の現象が生じるので、安いプリンタを複数台用意することは重要。

3) ハレパネ

ハレパネは糊付発泡スチレン板で、プラチナ万年筆 (株) の商品名 (商標) である。カッターで簡単に加工でき、軽く、見栄えがするので簡便な展示で多用される。欠点は貼り付ける紙によって反りが出ること。写真用紙など薬品を塗った厚い紙ではほとんど起こらない。展示で使われるのは7mmが普通。5mmはキャプションなど小さいものに使う。

プラチナ万年筆 ハレパネ

<https://www.platinum-pen.co.jp/hnharepane.html>

4) パーティション、ウッドラックパネルと板段ボール

小清水ツーリストセンターのギャラリーは、壁やパーティションに虫ピンや画鋲が使えない。そこで考えたのが、壁やパーティションにピン刺し可能な可搬式の板を立てかけ、長机で押さえるという方法である。板は次のものを用いている。

ウッドラックパネル。塗装発泡スチレン板でデュポン・スタイロ (株) の商品名。2019年5月にダウ加工。毎回用いているのはパネルカラーのクリームと黒、サイズは910×1820mm (3×6 サブロク [3尺×6尺] と呼ぶ) 7mm厚のもの。

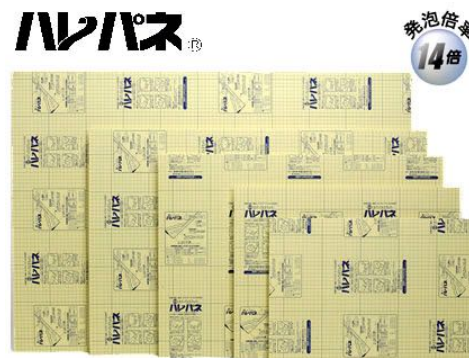
カラータイプ | スタイロフォーム・ウッドラックのデュポン・スタイロ

https://www.dupontstyro.co.jp/woodlac/woodlac_panel_cl.html?ac=6

板ダンボール。1枚板の段ボール、サブロク厚さ5mmを使用。質感が特有で展示空間の演出にも使われる。欠点は内部が中空部分が多くピンの効きが悪いこと。



上: 昨年の農大ロビー展会場
左: エプソンの大判プリンタ
下: 今年も用いたキャノンのA3プリンタ



5) 長机

展示資料は視線の統一や見やすさから通常ステージに置く。ステージは資料の性格や見せ方を考え個別に製作する場合もある一方、簡便な方法は既存の物品の利用である。農大口ビー展では板押さえを兼ねて会議用長机を用いている。寸法は180×45と日本の建築部品に共通する「三尺モジュール」に合致しており便利である。ただ高さが70cmと幼児には位置が高いため、彼らが上から覗くには踏み台を用意する。

6) かぶせ式ケースと障壁

展示ケースは事故や盗難が予想される資料の保護、あるいは観覧者の安全確保のために用いる。これも理想はオーダーであるが簡易展示ではアクリル製かぶせ式ケースを用いる。既製品もあるが、安価にオーダー可能である。ただし室内空間とは独立した温湿度管理はできない。

ケースに入らない大型の資料では、透明なアクリル板をカットして観覧者と資料を隔てる障壁として用いるとよい（右写真の矢印）。ホームセンターで安価にカットしてくれる。3mm厚が扱い易い。切断面は荒く手を切るのシリコンチューブなどでカバーする。

7) 固定器具

固定の器具は、資料や会場への影響、見栄えや美しさ、加えて展示終了後の保管を考えて用いる。資料の保存を考えると、破壊や変質変形が予想されるピン留め、接着剤や粘着物は使えない。重力を利用した展示台や支持具、糸や紐で結んで固定する。

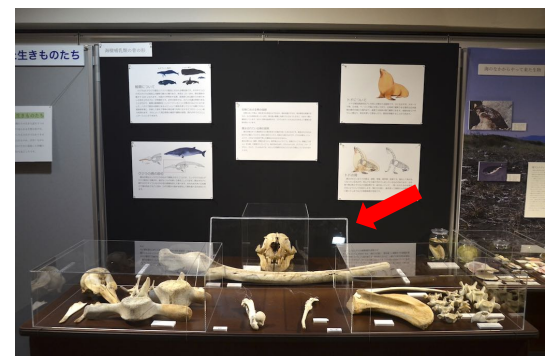
グラフィックやキャプションの固定方法として両面テープは最悪の選択である。陳列時にやり直しができない、少しでも貼り付けると壁や板が剥がれたり変色する。撤収時や保存時には他の物を意図せずひっつける、うまく剥がして保存しても粘着剤が残り変色を引き起こす。

両面テープは変色変質しても差し支えないハレパネに使うのであれば可。また、セロファンテープを輪にして両面テープ代わりにしてもよい。こちらの方が跡が残らない。

虫ピンと画鋲

壁面への固定では虫ピンが最も普及している。頭が小さく目立たないためから好まれる。逆にあえてピンを目立たせて目印にしたり、手作り感を出すために画鋲を用いることもある。虫ピンも画鋲も掲示物や壁板の在室を考え、針長（差し込み部分の長さ）を選択する

虫ピンの刺すにはピンニング器という専用の道具がある。写真の画鋲の名称はダルマ画鋲。



ひっつき虫と粘着ピン

通常の両面テープでは貼り付け力が弱くなる凹凸面への貼り付けには、粘土状の粘着剤や厚みのある両面接着シートを用いる。跡も残りやすく現状復帰が容易である。しかし粘着力は不足気味で、キャプション大では問題なく使えるが、A3判のハレパネでは数時間から数日で落下することが多い。

8) ワイヤーフック

ステンレス製のワイヤー〔針金は単線、ワイヤーは多数の針金をよってある。ケーブルという呼び方もあり、ワイヤーとケーブルは分野や場面で使い分けが異なる〕に引っ掛け針（フック）を取り付けた吊り下げ器具。額装作品などの展示でよく使われる。農大ロビー展では「銀の匙」コーナーの絵馬で使った。美術館に向けた専用製品もある一方、ホームセンターでも数百円から入手可能。

9) テグスワーク

テグスとは「テグスサン・カイコなどの幼虫の体内からとった絹糸腺を、酢酸につけて引き伸ばし、乾かして作った糸」（デジタル大辞林）。今日ではナイロン製の釣り糸を意味する。透明で強く、太さも選べるので展示資料や展示器具の固定に用いられる。

ロビー展では8号と20号を用いている。8号程度の太さが使い安い。強度に不安がある場合や、周囲を巻いて固定する時は2回以上巻くようにする。資料の固定、アクリルや木製品など軟らかい素材に用いる場合はテグスをシリコンチューブに通して傷防止とする。シリコンチューブは観賞魚用エアータブでもよい。

ロビー展ではアクリルケースや手すりへのグラフィックの固定に用いた（下写真）。

